

## 59 内科学教科書の結核記述の変遷と昭和期の日本の結核： 『内科書』を中心に

渡部 幹夫

順天堂大学

日本の医学教科書が明治維新前後の翻訳書を脱して、日本の医学書として書かれたのは第一次大戦後、昭和以降のことと考える。呉建・坂本恒雄共著として、南山堂より昭和6年より上中下巻初刊本が出版された『内科書』は、第二次世界大戦後、昭和23年より沖中重雄改訂により、昭和53年44版まで改訂を重ねた。第二次世界大戦をまたぐ、昭和の内科学教科書で、各巻700頁を超える大冊である。昭和5年の序は「我が国の学生及医家の読むに適した教科書を書いてみたいと思った。我国に多い病気については少しく詳しく、我国にまれな病気については成るべく筆を約いた。新学説も確かだと思ふものは取り入れた心算である。多少でも此書が学生及医家諸君の便益ともなれば幸いである」と短い。昭和26年の沖中による改訂版序では「大戦の影響等も加わり充分な改訂が出来ず、終戦となった。その後、米国のめざましい進歩した医学が洪水の如く日本に殺到し、これを消化するに寧日なき有様となった。ようやく落付をとりもどし、世界の医学におくれながらも正しく歩み始めるようになって来た昨今、内容に不備なところが多いのに驚いた。本書の附図の中に新しく米国の医書から引用したものが多数にあるが、米国の医学者に厚く感謝の意を表す」とある。昭和31年の序では「戦後の医学の進展はおどろくべきものがある。例えば、肺結核の治療に於いて、人工気胸によって多くの患者が処置されていた時代から、形成術・肺切除等をほとんど危険なく遂行せしめた化学療法の進歩を考えると、昭和10年前後の時代には殆ど内科医が想像もしえなかつた所であろう」としている。

『内科書』における肺結核の項の書き出しは初版本では「結核殊に肺結核は全人類界に於いて最多数を占むる疾患にして、本病はすべての死亡数の約七分の一を占むと称せらる」とある。昭和16-19年の版では「諸国にては、近時著しく減少せるに拘らず、本邦にては遺憾ながら減少せざるのみならず、最近は稍々増加の傾向を示せり。結核患者は1年間の結核死亡者の約10倍なりと推定せらる。而して昭和十一年の結核死亡者は145,160人なるを以て、本邦には現在140万人以上の結核患者存在することとなり」とある。

昭和27年の版は、「本邦の昭和22年度に於ける死因統計によれば、全死因中結核による死亡者が首位を占め、全結核死亡は146,241人で人口1萬に対して18.7である。欧米の文明諸国においては第一次世界大戦時およびその直後には結核死亡率は一時増加したが、近年には著しく減少し、第二次世界大戦中またその後も減少の道をたどりつつある。例えば昭和22年における各国の人口1萬に対する結核死亡は、米国3.4、英国5.3、デンマーク3.0である。本邦における結核死亡は少しく減少の傾向を示しているが、尚これに数倍している。本邦には現在140万人以上の結核患者が存在することとなり」としている。

『内科書』から離れて結核に対する社会の取り組みをみると大正3年日本結核予防協会が設立された。同年石原修の『衛生学上ヨリ見タル女工之現況』が刊行された。大正8年結核予防法(旧法)公布、昭和13年厚生省設置、国民総動員法公布、昭和14年財団法人結核予防会設立される。日本学術振興会がBCGに関する共同研究を開始した。昭和17年国民医療法公布、日本医療団が設立される。昭和18年日本学術振興会、BCGの有効性を発表する。終戦後の昭和24年ストレプトマイシンが進駐軍により日本に伝わった。昭和26年結核予防法(新法)制定。昭和27年結核死亡率半減記念式典が行われた。昭和28年の第1回結核実態調査の結果から、全人口の3.4%に当たる292万人の結核罹患と入院を必要とする患者数173万人、排菌患者80万人の推計がされた。

日本の結核研究は世界から独立した高度な研究としてすんだが、医学教科書の記述には、政治や経済界をとりこんだ社会的な活動の成果については乏しいように考える。